

「がん総合相談に携わる者に対する研修事業」報告書

評価委員会 報告

評価委員会委員長 久村 和穂
金沢医科大学医学部腫瘍内科学 講師

本年度は極めて限られた時間の中でピア・サポーター養成研修プログラムの見直し、テキストの作成、実態調査等が行われた。また、2019年2月9-10日にはトライアルとしてピア・サポート養成研修会が実施され、45名の受講者からは総じて高い評価を得ており、本事業が初年度に実施すべき事業は概ね完遂することができた。評価委員会では、今回改訂されたピア・サポーター養成研修プログラムをより受講者（ピア・サポーターを志すがん体験者、医療・行政関係者）のニーズに合うものにするために、また、本研修事業を通してがん患者のピア・サポート体制を強化・普及していけるよう、以下を提案する。

1. 研修プログラムの改訂等について

1) プログラム改訂のねらいと特徴について

本研修プログラムは、がん体験者が適切に「自己の体験を語る」ことを重視するプログラム構成となっている。これまでのピア・サポーター養成研修会では、個人のがん体験を適切に話すための学習や訓練があまり行われてこなかったことを鑑みると、今回の改訂の重要な特徴の1つである。ただし、実際のピア・サポートにおける語りは一方的なものよりも双方向的なものであり、サポーター自身が「語る」ことができ初めて傾聴が可能となることを考えると、傾聴のための「体験者同士の語り合い」とする表現の方が、本プログラムの特徴を適切に表すと考える。

国内で既に実施されているピア・サポート活動の形態としては、サロンやグループ・サポートなど「語り合い」を重視するピア・サポートもあれば、相談者自身のよりよい意思決定につなげることを優先課題とするピア・サポートもある。「語り合い」をピア・サポートの本質のように定義してしまうのは、ピア・サポート活動の可能性を狭めてしまうことになりかねないこと、また、その活動形態によって重点を置くプログラムも異なること

を考慮されたい。

また、本研修会の対象者をごん体験者だけではなく、ピア・サポーターの活動の場を整える役割が期待される医療・行政関係者に拡げたことは、今後医療機関等におけるピア・サポーターによる支援体制の強化・普及のために非常に有意義な試みであった。特にピア・サポート活動が未実施の地方自治体や医療機関の職員にとって、本研修会を通して初めてピア・サポーターと交流し、実際のがん体験を聴く機会が得られたことは、ピア・サポートに関する理解を深めるにあたって特に効果的であったと考えられる。

ただし、衆人環視的な環境下での体験談の発表やロールプレイ演習が含まれる研修会の実施は、受講者にとって過大なストレスとなる場合も考えられた。よって、評価委員の中には、ピア・サポーター養成と都道府県等に対する普及への働きかけとは別枠として扱うべきではないかとの意見もあった。特にピア・サポート未実施の都道府県行政・医療関係者向けの際は、ピア・サポーターとしての経験を積んでいるがん体験者の協力を得ることも付け加えられた。

2) トライアル研修会の企画・実施について

研修会1日目「自己の体験を語る」では1人の受講者が医療・行政関係者を含む約30名を前にスピーチをする演習が行われた。今回の受講生はピア・サポーターとして経験を積んでいる方も少なくなく、多くが体験談を適切にまとめて伝えることができていた。その一方で、本研修会の本来のターゲットである、これからピア・サポート活動を開始する受講生にとっては、心理的負荷が大きい演習になるのではないかとの懸念もある。

がん診療連携拠点病院（以下、拠点病院）等のがんサロン等におけるピア・サポート活動を想定した場合、小グループ（医療従事者を含む）の中での体験者同士の語り合いの場面設定での演習がより実践的であり、受講生の心理的負荷も軽減でき、演習時間の短縮に

もつながると考える。

2 日目のロールプレイは、特にがん体験者の受講生から高い評価を得ており、有意義な学びが得られていたと考えられる。ただし、ロールプレイの実施にあたっては下記の点について留意すべきと考える。

ロールプレイにおける事例が個別対話を想定していることについて、未経験者にはハードルの高さを感じる。ロールプレイ実施前に、事例検討のようなグループワークや、傾聴や応酬話法などの基本をグループ内において、1対1で実習してみるなどのプロセスを経て、コミュニケーションや環境を醸成してから行う等の工夫があると良い。また、本研修会が想定するピア・サポートがサロン等でのグループでのピア・サポート活動であれば、グループでのロールプレイ等の方法も検討されたい。

今後、本研修会を各都道府県においてピア・サポート活動の未経験者に対して実施する場合、周囲から医療・行政関係者に観察をされながら行うことは心理的負担が大きいと推察される。特に初めて対人支援について学ぶ受講生にはより安心・安全な場でロールプレイを行うことが重要であると考えられる。ロールプレイの会場が狭いことでより心理的負荷を感じる場合もあるため、物理的環境にも配慮が必要である。

また、ロールプレイで用いたシナリオには難易度の高い相談内容も含まれていたため、演習の開始前にグループ内で適切なシナリオが選択できるような工夫があると良い。もっとも、対象がピア・サポート未実施の都道府県行政や医療従事者の場合は上記の限りではない。トライアル研修会をそのまま各都道府県での研修に使用するためには、プログラムの変更等（対象者をピア・サポーターのみにするか等）も適宜必要になる。

3)教材とその活用について

ピア・サポーターががん患者・家族の話を落ち着いて聴けるようになるためには、テキストにがんの部位や患者の状況、患者の人生観によりがん医療の選択肢が多岐にわたること、がんに関する基礎知識を解説するセクションを含めることが望ましい。研修会において医療者からテキストに基づいてがんに関する基礎知識を解説してもらい講義を聞き、ロールプレイで語られる患者・家族からの相談内容を肯定的に聴くようになれると良い。

また、テキストには「索引」があると良い。索引があることでテキストの記載ページが探しやすく、活用度は高まると考えられる。平成 25 年度事業で作成されたがんサロン編テキストには「用語解説」が設けられていたが、解説つき索引はさらに有用である。

本テキストに新たに含まれた自分と相手のバウンダリーに関するセクションは非常に重要な内容である。多くの事例を示しながら丁寧に講義がなされ、演習でも体験する場面等の工夫が大切である。

医療従事者には法的に守秘義務が規定されているが、ピア・サポーターにあっては守秘義務に関する法的義務はなく、各人の倫理規範に頼ることになる。よって、ピア・サポーターの養成にあっては、守秘義務に関して問題となる、より具体的な場面や例をテキストに盛り込み、研修の中で運用していくことが必要である。また、ピア・サポーターが院内で受けた相談内容に関する医療従事者への報告・相談、院内での情報の取り扱い、相談記録の内容・方法、相談者との連絡先の交換等については、将来的に一定のルールを取り決め、テキストに具体的に記述する必要があると考えられる。

研修会で使用されたスライドの多くはとても分かりやすいものだったが、テキストとのリンクがあると良い。将来的には PEACE プログラムのように標準スライドを用いた標準化されたプログラムを提供し、地域の事情に応じて工夫できる余地を残したスタイルで実施できると良い。

2. 研修プログラムの普及について

がん体験者と医療・行政関係者がペアで参加することが期待されていたが、実際にペアで参加した受講者は 5 組であり、本研修プログラムの目的を達成するためには、受講者のリクルート方法を再検討する必要がある。特にピア・サポーターの研修会を実施したことのない都道府県のがん対策部門、および、ピア・サポーターの導入が進んでいない拠点病院の実務担当者だけではなく、管理職クラスへの本事業の周知と参加を促す工夫が必要である（例：本研修会にがん体験者とペアで参加した都道府県や医療機関を本事業のホームページで公表する）。また、がん体験者・医療・行政関係者が協働してピア・サポート活動を

開始した好事例をホームページで紹介する等の工夫も検討されたい。

今後、本研修会を全国に広めていくためには、研修会実施・運営のためのマニュアル(手引き)の作成も必要である。評価委員からは、各都道府県で自治体ごとの取り組みを推進できるような仕掛けが必要との意見もあった。

また、本研修会で学んだ内容について、受講者に対してその後のピア・サポート活動に実際にどの内容がどの程度役立ったのかを調査し、その結果に基づいてプログラムを改訂する必要がある。

本事業の性格から、ピア・サポートを実践してきた人、ピア・サポートを受けた人に対して調査を行う、あるいはピア・サポート実践団体やピア・サポーターにパブリックコメントを実施するなど、その生の声を何よりも大切に考え、事業に反映していく必要がある。調査は都道府県にとどまらず、政令市や市町村にもピア・サポート実践の好事例等が存在するので、調査対象を公募することも効果的と思われる。また、ピア・サポーターを受け入れる、あるいはバックアップする拠点病院の実情や現場の声を受け止めることも重要である。医療機関が、ピア・サポート導入にあたって持つ懸念は「相談対応力の質」「活動のマネジメント主体や責任の所在」「個人情報等の守秘の義務などコンプライアンス」である。医療機関がそれらの判断材料とするのは、研修プログラムの内容や仕組み、研修の期間であることも考慮されたい。

3. ピア・サポーターによる支援体制の強化・普及について

欧米でピア・サポーターを養成している団体では、がんが無症候になって7年経過したピア・サポーターは専門的なサポーターとして関わることを推奨している。わが国におけるピア・サポーターによる支援体制の強化・普及を図る上で、ピア・サポーター養成研修会が将来的にピア・サポーターによる支援体制が強化・普及してくることを見越し、Strategic Plan(戦略計画)としてのSuccession Plan(後継者育成計画)と位置づけ、ピア・サポーターのキャリアパスを本研修会のビジョンとして設定していくことの検討が必要と考える。この検討はがん患者自らが人材のDiversity(多様性)をお互いに

Inclusion(包摂)することを意識し、今後の日本経済の持続的成長の原動力となることを示すことになり、がん患者の就労問題に対しても示唆する部分を含むと考えられる。

4. 今後の本事業の進め方等

今後は各委員会およびワーキング・グループ(WG)の役割を明確にし、本事業に関わる全ての委員やWGメンバーが本事業の全体像、および、タイム・スケジュールを共有することが重要である。本事業がより生産的で有意義な事業になるよう、委員会間での課題、エビデンスとして不可欠な調査データの共有や情報交換をする機会を設ける等(例:各委員会の議事録の公表、オブザーバーとして委員会やWGの会議に参加)の工夫が必要である。